

2019 年(令和元年) 6 月 10 日発行 No. 1 5

公益社団法人 日本山岳会 山形支部 〒997-0034 鶴岡市本町 2-6-9 事務局長 佐藤 一広 TEL/FAX:0235-22-4079

編集:河口 昭俊

特 集 号

2019 年 1 月 29 日~2 月 5 日 厳冬期モンゴルスキーツアー報告

執筆・写真:野堀嘉裕・粕谷俊矩・武田幹男・竹永哲夫

目 次

1.	趣旨および参加者	1
2.	行動経過	2
3.	モンゴルでのスキーについて	13
4.	衣食住	17
5.	自然と人間の共生	27
6	旅行経費	30

1. 趣旨および参加者

筆者は2009年からモンゴル北部のフブスグル県ダルハッド地域で森林のバイオマス調査や山火事跡地の森林遷移の調査を行ってきた。当時は岩手大学連合農学研究科に所属していた4名の研究者、ドイツ・ライプニッツハノーバー大学の研究者、モンゴル生命科学大学の研究者らとともに各種の調査を行ってきた。筆者らの森林調査は樹木年輪の形成が終わる8月から9月に行われるが、標高が1600mを超える同地域では9月には積雪を観測し氷点下の気温になることもしばしばである。気象観測の研究者である弘前大学准教授の石田祐宣博士によると冬季の最低気温は摂氏マイナス40度を下回る記録があるそうだ。

筆者はしばしば話題としてモンゴルの自然や景観、気候について山岳会の仲間に解説してきたが、実態を把握することは極めて困難である。そこで、厳冬期のモンゴルを訪れ、自然環境や景観を実感する企画を立案し、支部会員に提示した。旅行計画や移動経路などは山形支部ホームページに掲載されている。

この趣旨に賛同し厳冬期のモンゴルスキーツアーに同行したのは野堀支部長 (15137) 他、粕谷俊矩氏(9595)、武田幹男氏(15526)、支部友(福島支部所属) 竹永哲夫氏(14939) の4名であった。

2. 行動経過

1日目:2019年1月29日(火)旧暦12月24日(月齢23.1)

18:00-:羽田空港国際線出発ロビー集合、宅配別送荷物受取

18:30-: KAL 受付カウンターで搭乗手続き・荷物の預入、出国審査

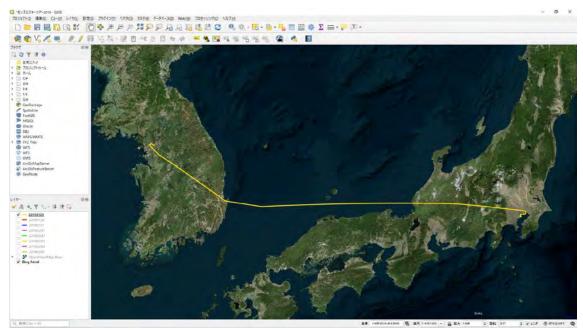
19:50-: 東京羽田空港→ソウル金浦空港 (KAL710 便)、入国審査・通関

23:15-: 金浦空港駅→ソウル駅 (AREX)

24:00 : スカイコージーハウス着

野堀は JR 羽越線が強風で不通のため鶴岡→仙台(高速バス)、仙台駅→東京駅(東北新幹線)で移動。その後は東京駅→浜松町(JR 山手線)、浜松町→羽田空港(東京モノレール)へ移動。粕谷・武田の2名は寒河江駅→山形駅(JR 左沢線)移動。山形駅で竹永哲夫と合流の後、山形駅→東京駅(山形新幹線)へ移動。ここから全員合流して移動開始。

野堀は全行程で GPS(Garmin Oregon650)を所持し、移動経路を記録した。帰国後にノイズデータのクリーニング後、日付ごとに shape ファイル、kmz、kml データとして保存した。移動経路は ArcGIS、QGIS、GoogleEarth 等各種の GIS データに変換されており、山形支部ホームページで閲覧可能である。



1月29日:羽田空港から金浦空港までの移動経路(QGISで表示)

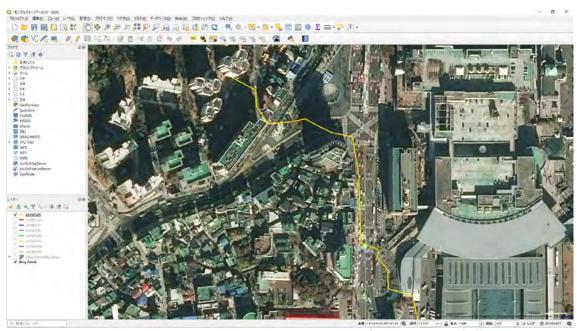
金浦空港からソウル駅へ向かう空港高速鉄道 AREX はプリペイドカードを購入して乗車する。このカードは運賃にデポジット料金 500 ウォンが付加されている。改札口の手前に自動販売機があり日本語の説明表示に切り替えて購入でき

るので大変便利である。4人分一度に購入も可能である。デポジット料金は目的駅に到着後に自動返金機で受け取ることができる。



AREX 乗車用のプリペイドカード (500 ウォンはデポジット料金)

ソウル市内宿泊先のスカイコージーハウスは Bokking.com で予約したが、一般的なホテルではなく韓国インバウンドに対応したシェアハウスの高層マンションであったため、入り口が分かりにくく探すのに苦労した。マンション近くのコンビニの従業員に電話で連絡していただき、家主と面会することができた。親切な人に対応していただき大変感謝である。今回のエアチケットは羽田→金浦、仁川→UB なのでトランジット時の荷物は全て各自で持参しなければならなかった。空港高速鉄道 AREX が利用できて便利だが、荷物の重さを実感した。



1月29日:ソウル駅からスカイコージーハウスへ移動

2日目:2019年1月30日(水)旧暦12月25日(月齢24.1)

07:00-: スカイコージーハウスで朝食 08:00-: 明洞市場・南大門・南山観光 10:00-: ソウル駅→仁川空港 (AREX) 11:30-: KAL 受付カウンターで搭乗手続き・荷物の預入、出国審査

13:00-: 仁川空港→UB チンギスハーン空港 (KE867 便)、入国審査・通関

16:30-: 乗用車2台に分乗、エーデルワイスホテル着 18:30-: 市内で夕食(4人+ホイガさん+従弟さん)

マンションで朝食後に市内観光に出かけた。目的地は南大門である。途中で明洞市場を通過したが、早朝のため開店の準備で忙しい状況であった。南大門もオープン前であったので、門前で日本語のパンフレットを頂き遠望することとした。その後南山の一角の安重根碑を見学した。彼は伊藤博文を暗殺した人物であり、韓国独立の英雄である。南大門を含め韓国の歴史の一部を垣間見た気がした。





スカイコージーハウスで朝食の朝食。韓国風のキムチもある。



明洞市場



南大門



安重根の記念碑

3日目:2019年1月31日(木)旧暦12月26日(月齢25.1)

09:30-:朝食

10:00-: 仏教寺院参拝、SIM カード、防寒具、夜行列車チケット購入他。

13:00-: UB 市内→スカイリゾートスキー場(借上車)

14:00-: スキー等のレンタル。

14:25-: リフト4時間券

17:30-: 軽食

20:20-: UB 駅→ダルハン駅(夜行寝台列車)

朝一で UB 中心部にある仏教寺院を参拝し旅の安全を祈願した。SIM カードの 購入は2部屋宿泊の場合や買い出しなどでチームが分散した場合に連絡が可能 な状態を確保するための安全策とすることとし、武田と野堀のスマホ (タブレッ ト) に導入した。SIM カードの仕様は30日間10GBである。その後UB駅で夜行 列車チケット購入、防寒具(帽子など)購入した。移動は借上車のランクル・プ ラドである。午後は、UB 市南部にあるスカイリゾートスキー場でスキーを楽し んだ。スキーについては後術する。





モンゴル国内で販売されている携帯電話用の SIM カード



エーデルワイスホテルでの朝食



氷のデモンストレーション



UB 中心部、旧正月用の市場



仏教寺院で旅の無事を祈る



ウランバートル駅プラットホーム



チケット



列車の乗務員と武田氏



車内の竹永氏

午後 8 時にエルデネット行きの夜行列車に乗車した。夜半なので景色は全く 把握できなかった。夜行列車はダルハン駅で 2 時間ほど停車し、2 月 1 日未明に スイッチバックして進路を南下し、エルデネットへ向かったと推定される。寝台 列車は 4 人で 1 部屋のコンパートメントとなっており、向かい合わせの 2 段ベッドとなっている。予めホイガさんがネットで座席を予約しておいてくれたのだが、2 部屋に分散する席しか取れなかった。乗車後にホイガさんが 1 部屋に日本人 4 人が入れるように交渉してくれた。寝台列車には紅茶のサービスがあり、 基本的に禁酒であるがウォッカ 1 本を寝酒として空けてしまった。

4日目:2019年2月1日(金)旧暦12月27日(月齢26.1)

-07:00:ダルハン駅→エルデネット駅(夜行寝台列車)

07:30-:エルデネット駅→セレンゲリゾート(借上車) 09:30-:ホテルで朝食

10:30-: 散策

12:30-: 昼食

13:30-: スキー・乗馬

18:30-: 夕食

寝台列車の車内は摂氏 25 度、エルデネット駅到着時外気温は摂氏マイナス 22 度であった。エルデネット駅には 7 時に到着したが、まだ暗いので眠気が覚めない。駅前の駐車場に借上げ車のランクル・プラドが待機してくれていた。ホ

イガさんの従弟が夜行列車と並走してくれていたのだ。従弟さんはここからバ スでUBに向かうとのことであった。ホイガさんの運転でプラドに5人が乗車し てセレンゲリゾートに向かう。所要時間は約1時間半であった。



エルデネット駅舎





ロシア製プルゴン



セレンゲリゾートホテル



粕谷さん乗馬準備



竹永さん乗馬準備

セレンゲリゾートは鉱山会社の保養施設として開発されたリゾートというこ とであった。ロシア製のプルゴンという名前の多目的軍用車でリゾートを訪れ る観光客がいたが、鉱山会社の職員とその家族と思われた。午後の乗馬中はマイ ナス20度程度だったので、速足で歩くと顔が痛いほど寒かった。

5日目: 2019年2月2日(土)旧暦12月28日(月齢27.1)

09:30-:朝食

10:30-: セレンゲ川散策、原野散策、バックカントリースキー、川で氷の採取、 市場で土産買い出し、ホテルに帰着。その後昼食。

15:00-: セレンゲ川近隣の農家へ移動。ゲル民泊

朝食後にリゾートから北に向かいセレンゲ川の河原を散策した。流れが速い部分では氷が薄く、水を汲んでいる農家の人がいた。原野の景観は壮大でモンゴルならではの遠望が見られた。北斜面の森林はカラマツではなくゴョウマツであった。家畜が食べることのできる高さまで枝が付いていないことがわかる。



セレンゲ川の河原



原野で景色を望む

筆者は STC のショートスキーを持参していたので、ここでバックカントリースキーを楽しんだ。気温が低すぎて雪が砂のようであり、滑らないので下降斜面でもスケーティングしなければならないほどであった。

午後は、市場で土産を購入し後、セレンゲ河畔の農家のゲルに民泊させていただいた。新暦の2月2日は旧暦の12月28日でありモンゴルでの旧正月前の休みに入る時期であった。普段はエルデネットやダルハンなどの都会に住んでいる家族が集まって正月を迎える大切な時期ということであった。年末の忙しい時期に宿泊させた頂いた農家の方には大変お世話になりました。心から感謝します。



セレンゲ川で氷の採取



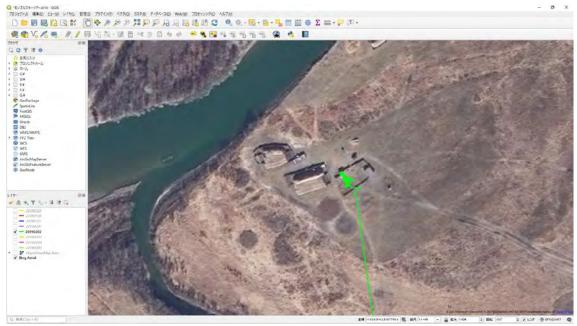
マーケットで土産を購入



民泊したゲル



ゲルの内部



民泊ゲルキャンプの周辺 (画像は BingMap)

6日目:2019年2月3日(日)旧暦12月29日(月齢28.1)

09:30-: 朝食後、ゲルキャンプ→エルデネット市街移動

10:30-:市場散策後、昼食

13:30-:エルデネット→ダルハン→UB 移動: KHABU ホテル着デポ

19:00-: 夕食 (マキシポット)

21:30 : KHABU ホテル着泊

早朝ゲルキャンプ前で自動車のセンサーの車外気温は摂氏マイナス33度、手持ちの寒暖計はマイナス30度以下で測定不能領域となっていた。一方ゲルの室内温度は寒暖計で摂氏22度であった。今回のツアーを通じて最低気温はここで記録した。当然だが、この時期は新月直前で夜は月が出ていないので、北斗七星や北極星を探すのが難しいくらい星空が輝いていた。モンゴルと日本との時間差は1時間しかないが、経度は東経105度付近であり日本と30度以上の違いがあるので太陽が南中する時刻は実質的に2時間の時差がある。この地域の夜明けは午前8時過ぎであり、真冬でもサマータイム制度を実施しているようだ。



放射温度は-29度



プラドの外気温計は-33度



メンバーと民泊した家族

後方左から:武田・竹永・農家の娘さん、手前左から: 粕谷さんお婆さん、孫、野堀

ダルハンから国際道路(ロシア→モンゴル→中国を結ぶ)を南下してUBに戻ったが、途中の景色は放牧されているヒツジやヤギの群れに何回も出会った。最もモンゴルらしい景色である。夕方の7時にはUBのKHABUホテルに到着した。



極寒にも関わらず放牧されているヒツジとヤギ

7日目:2019年2月4日(月)旧暦12月30日(月齢29.1:新月)

09:30-:朝食

10:30-: ノミンデパート・ゴールデンゴビ・UB 駅前商店で土産買出・昼食

15:00-: UB 市内→チンギスハ→ン空港移動

16:00-: 搭乗手続

17:10-: UB 空港→仁川空港 (KE868 便)

21:30-: 入国手続·通関

22:30-: 仁川空港駅→仁徳駅 (AREX) 23:30-: 新羅ステイ麻浦ホテル泊



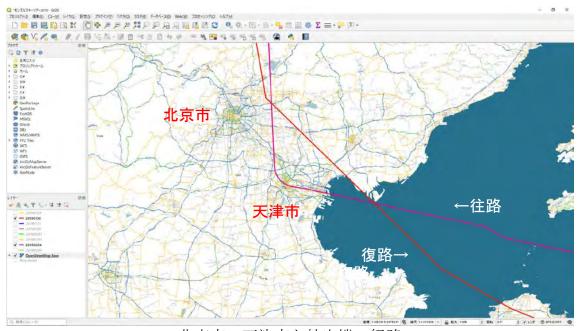
日産パトロール



レストランでの昼食パスタ

午前中はノミンデパート (旧国営デパート) やカシミヤ専門店ゴールデンゴビで土産を購入した。モンゴルはユーラシア大陸のほぼ中央にあり、物流も盛んである。UB 市内では日本国内では販売されていない日産車種のパトロールという大型 SUB が普通に見られた。一旦 UB 駅舎近くのマーケットに立ち寄ったのちに空港へ向かった。

モンゴル滞在の 6 日間、ホイガさんには面倒な注文や移動をお願いしたが、いつでも快く対応していただいた。空港でお別れの前にホイガさんからメンバー全員にウォッカやお菓子のプレゼントがあった。感謝するのはむしろこちらである。



北京市・天津市と航空機の経路

UB チンギスハーン空港から仁川空港へ飛行する KE868 便の窓からはモンゴル の景色が名残惜しい。中国の北京や天津上空ではスモッグの下に都市の明かり が見えてとても奇妙であった。

仁川空港から仁徳駅への移動は既に慣れた AREX の各駅停車便を利用した。仁徳駅下車後新羅ステイ麻浦ホテルを探した。駅周辺は都市化が進んでいて高速道路、高層ビルが林立しているため目的地まで 200m範囲なのに見つけ出すのに一苦労した。新羅ステイ麻浦ホテルは日本のビジネスホテルと同様で大変綺麗であり、日本語での会話も可能であった。

8日目:2019年2月5日(火)旧暦1月1日(旧正月)(月齢1.2)

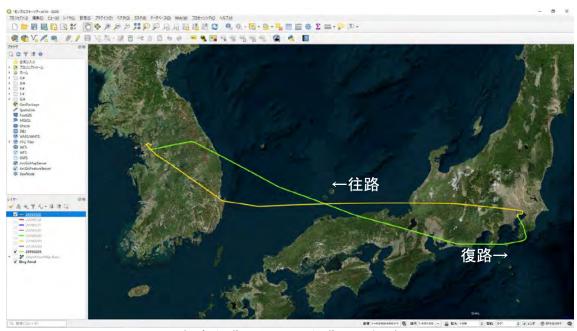
06:15-: 仁徳駅→金浦空港駅 (AREX)

07:00-: 搭乗手続き・出国審査

09:00-: 金浦空港→羽田空港 (KE707 便)、入国審査・通関

12:00:羽田空港で解散

最終日は6時前に起床し、仁徳駅から金浦空港に向かった。7時には空港に到着し、搭乗手続き・出国審査後搭乗口付近でコーヒータイムとした。金浦空港から羽田へ向かう KE707 便は富士山の南側、伊豆半島上空を通過した。雲の上に浮かぶ富士山が良く見えた。日本に帰ってきた感慨が深い。全員無事に羽田空港に到着し、日本茶のティータイムを兼ねて解散式とした。



金浦空港から羽田空港への帰路

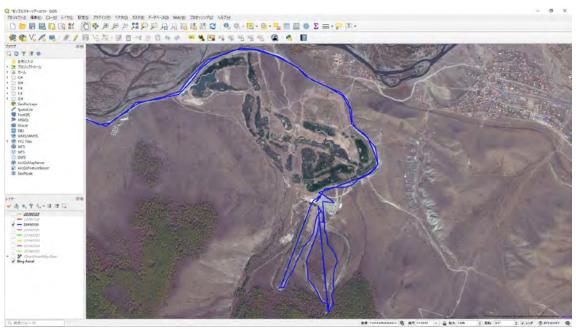
注:羽田空港と金浦空港の空路は往復で異なっていた。

3. モンゴルでのスキーについて

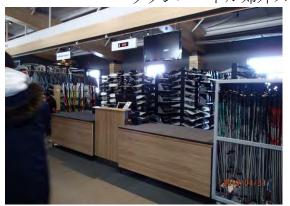
今回のツアーは「厳冬期モンゴルスキーツアー」と題しているのでスキーについて記載しなければならない。今回、スキーができた三か所について解説しておこう。

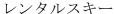
1) ウランバートル・スカイリゾート

ウランバートル郊外のスカイリゾートスキー場ではリフトは 2 基ありコースは 5 コースとなっていた。最上級難度のコースは入場が制限されていた。競技用コースと考えられる。標高は 1380mから 1570mの範囲にある。スキー場の北側にはゴルフ場が併設されており、モンゴルでの新しいスポーツ施設として市民に親しまれているようだ。貸スキーの品質は日本と同様で悪くはなく、レストランや休憩場も綺麗で快適であった。



ウランバートル郊外スカイリゾートスキー場







ロッジ内部

ホイガさんに聞いた話では、大気汚染のひどいウランバートル市内を避けて、 子供を連れて遊びに来るリゾートとして最近脚光を浴びるようになってきたの だという。



メンバー4名

ゲレンデは人工降雪機で作る





武田氏

粕谷氏





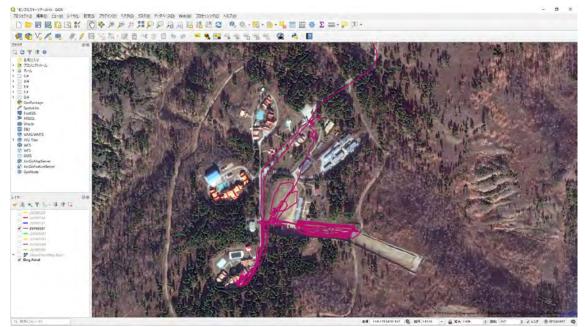


竹永氏

2) セレンゲリゾート

セレンゲリゾートはエルデネットから約 50km 北にあり、標高は 900m 程度で ある。鉱山会社の保養施設として開発されたリゾートということであった。グ ーグルアースの画像を見ると 400 メートルトラックの周囲に建物群 5 カ所あ り、東側にスキー場があることがわかる。

スキー場は人工降雪機で雪を降らせる施設であり、雪面は比較的良く整備さ れたスキー場といえる。ただし、ロープトウが1基あるのみで、しかも客が来る 時だけ動かしてくれるシステムであった。レンタルスキーや靴のセットは数も 少なく貧弱であった。野堀は持参したショートスキーが使えたので快適であっ たが、粕谷氏・武田氏・竹永氏はレンタルスキーや靴が合わなかったため、早々 とスキーからチューブ滑りに交換した。ただし、遠方の松林の景観は大変良かっ た。ホイガさんは初スキーだったが、上達が早く、ターンできるようになってき て楽しんでいた。



セレンゲリゾート周辺



粕谷氏・武田氏・竹永氏



レンタルスキーは貧弱



野堀氏のスキー



ホイガさんは初スキー体験

3) バックカントリースキー

モンゴルの原野を上空から見ると、北斜面には森林があるが、南斜面には雪原 が広がっていて、どこでもスキーができそうに見える。しかし、実際に地上で見

ると傾斜はそれほど急ではなく、スキーで滑降するのに好条件とは言えない。ま た積雪はせいぜい 10cm 程度で、草の先端が雪上に見えている状態なのだ。さら に、気温が低いので雪は砲弾状の結晶になっているので、砂の上を滑っているよ うな感じなのだ。丘の頂上まで車で登ってもらい下りをスキーで下降したが、思 うように滑らないので苦労した。しかも寒すぎて体も思うように動かない。こん なスキーは初めてだ。

モンゴルでバックカントリースキーをするなら地域や斜面の角度など事前の 調査が必要ということだろう。



上空から見た原野



原野は標高差が少ない



比較的急な斜面でのスキー



丘の頂上から下降

4. 衣食住

1) 服装

①私たち旅行者の服装

厳冬期のモンゴルなので旅行前の最大の関心事は服装であった。日本との気温差は30度近くあるはずなので、移動時の気温差にも注意しなければならない。ツアー最初の滞在地であるソウルの朝夕の気温は低く、最低気温は氷点下5度程度であったが、日差しが強く空気が乾燥していることが感じられた。私たちは、日本から着ていったものと同じ服装で、早朝のソウル市内を観光したが、歩いていると汗ばむ程度の陽気であった。上:肌着+カッターシャツ(フリース)+スキー用ジャケット、下:アンダーウェア+タイツ+ジーンズ、厚手の靴下と帽子は必須。写真を見てわかるとおり、ソウル市民は寒さに強いようだ。



ソウルでの私たちの服装(右から2番目は宿のオーナー)

モンゴルに到着した次の朝は一段と気温の低下が感じられた。ウランバートル中心部のスフバートル広場の氷の彫刻前では気温が氷点下 20 度以下であった。氷の彫刻を素手で触ったら大変なことになると予想していたが、実際にそのようなことはなかった。まるでプラスチックを触っているような感触で冷たく感じないのだ。掌の温度では氷が解けないので、冷たく感じないということなのだろう。寒さの違いを実体験した瞬間であった。ただし、気温を暖かく感じるようなことはなく、オーバーズボンを履かないと下半身が寒すぎだ。手袋も必須である。スキー場に出かける前にウランバートル駅で夜行列車のチケットを購入したが、その後駅の側の小さなマーケットで市民が普通に使用する帽子を購入した。日本から華奢な帽子しか持参しなかった竹永氏と野堀は、羊毛と毛皮でできた冬用で厚手の帽子は良いお土産となったはずだ。

ウランバートル郊外のスキー場は標高が市内より 200 から 400m高いのでス モッグがなく空気が綺麗なことが実感された。天気は良いのだけれど、放射冷却 は日中も続いており、またスキーで滑っていると風圧が感じられるので体感温度が著しく低下する。スキーウェアのフードをかぶっても、ファイスマスクをしても寒い。服装は、上:肌着+フリース+羽毛服+スキーウェア、下:アンダーウェア+タイツ+キルティング+スキーウェア、厚手の帽子と手袋(インナー手袋)。 セレンゲリゾートでは日中でも氷点下 25 度以下であったが乗馬の際はスキーの格好と同様で問題なかった。ただし、室内と外気の温度は50度以上もあるので、車内や室内に戻ってきた時にはアウターを脱がなければならない。この服装調節は当たり前なことであるが、なかなか対応できないことがわかった。外気温が寒すぎるので、室内に戻ってしばらくたってからアウターを脱いだり、外に出てからアウターを着たりすることがあった。



スフバートル広場の氷の彫刻



スキー場にて





乗馬の服装はスキーウェアで問題ない





大雪原でのひと時: 手袋なしでは相当寒い

②現地の人たちの服装

ウランバートルなどの都市部では私たちと同様の服装をしている人が多いが、 地方で遊牧をしている農家の人たちはデールと呼ばれる民族衣装を着ている。 デールは日本の和服と同様の上着で男女ともに左前である。





農家のお婆さんの服装。デール以外は日本と変わらない。





普段着の民族衣装デールは男女ともに左前

生地は厚手のウールかカシミヤ、まれに絹で、中綿となっているので日本の丹前に近い。左前の右側には二か所にボタン状の留め具が付いている。光沢のあるものは女性用、フェルト状のものは男性用である。正装用と普段着があるようだ。帯は、男性は皮製ベルトの場合もあるが、一般的には幅広のウールでできている。さすがヒツジの国モンゴルならではである。子供の服装は日本の北国と変わりない。

2) 食事

UB到着直後の夕食は、ホイガさんの案内でホテル傍のレストランでバイキング形式の夕食を摂った。羊や牛、馬等の肉のほかチベットのナンや野菜も豊富であった。モンゴルでは生鮮野菜は中国からの輸入が中心であったが、最近では温室栽培の野菜が出回るようになってきた。いわゆる野菜工場がモンゴル国内にも普及してきたということだ。野菜の普及によりこの頃のモンゴルでは平均寿命が延びてきているという。

写真では朝食、昼食、夕食の順に紹介することとしよう。 朝食は日本のホテルの洋食セットとほとんど同じだ。卵焼きは卵二つが普通で、ソーセージかサラミが付いている。パンは固めだが香ばしくて美味しい。一食分にパッケージされたバターかジャムも美味しい。スープが付いている場合とない場合があるが紅茶かコーヒーは必ず付いている。ペットボトル以外の冷水は存在しないので、水が欲しい時はペットボトルの水を注文するしかない。





朝食:日本とほとんど同じ、トースト、卵焼き、サラミ、スープ等







牛茹肉、ライス、野菜サラダ

昼食は想像よりずっと量が多い。日本で考える夕食とほぼ同量が提供される。 肉の種類は牛か羊が主で、馬や山羊、鶏肉の場合もある。肉の調理法は煮込むの

が主で、岩塩で味付けしてある。焼いた肉はまず出てこない。滞在中一回も焼肉 は食べなかった。昼食の麺類は一般的で蕎麦やうどんは日常的にモンゴル人も 食べるという。麺類の調理法は煮込むのが一般的だが、焼きそば風の麺類もある。 最近では、日本独特のラーメンが流行っており、日本人には全く違和感がなかっ た。今後、海外で食べる日本食の代表的存在となるだろう。



昼食:ラーメン、鳥の唐揚げ



煮込み蕎麦



夕食: 茹肉、ナン、野菜のバイキング



茹肉、ポテト、煮野菜



ホーショル (餃子)



モンゴル流のシャブシャブ

初日の夕食は茹肉やナン、フライドポテトなどのバイキングであった。チーズ や野菜が豊富でビタミンの補給は問題なさそうだ。レストランでの夕食では煮 込んだ肉とパスタ、ポテトなどのワンディッシュディナーが普通である。ホーシ ョルと呼ばれる肉餃子は一般的でモンゴルでは毎食でも食べるという。餃子の 皮は小麦で、中身はヒツジや牛肉のたたきである。大きさは手のひらほどで大き

い。調理法は蒸すのが普通である。このホーショルを一人で10枚も食べるのが普通だというから驚きだ。我々は一人で3枚食べれば満腹だ。最終日の夕食はモンゴル流のシャブシャブを食べた。一人用の鍋にアルコール燃料のコンロで熱源とする。鍋の湯はお湯ではなく味が付いたスープが入れられている。スープは数種類あり選択できる。シャブシャブ用の肉は羊や牛、馬肉などのスライスで種類は豊富である。肉類以外にも豊富な食材をシャブシャブ風に茹でて食べることができ出汁が利いてきて美味しくなってくる。ビールやウォッカが進む。



夕食:冷凍のボーズを蒸すところ



チャイとボーズとビールとウォッカ



馬乳酒を混ぜる樽



夕食への感謝の言葉



ゲルのキッチンは万能だ



チャイと乾燥チーズのおやつ

一方、ゲルでの食事はかなり違っていた。ゲルでは中央のストーブが唯一の加 熱調理器具であり、食材は蒸すか煮るかのどちらかしか選ぶことができない。ボ ーズと呼ばれる肉饅頭をご馳走になった。底から 3cm 程 (200cc 位) お湯を入れた底の丸い中華鍋に、穴あきプレートの上に調理用紙を敷き、凍ったボーズを 40 個ほど置き、30 分程蒸す。一人 10 個ほど頂いた。全部食べ切ることは、足りないことを意味する。たくさん残すのは失礼だ。正直に食べられる個数を申告した上でいただくのが当たり前に妥当だということが良くわかった。

何処のゲルでも入り口の左側にプラスチックの樽があり、馬乳酒を造っている。朝晩かき混ぜて発酵を促進させるのだ。樽を入口付近に置くのは温度の調整と思われる。外気はマイナス30度以下にもなるので、アルコール度数の低い馬乳酒は凍結してしまうし、ゲル内の温度の高いところに置けば腐敗してしまうだろう。入口近くがちょうどよい発酵環境なのだとわかった。低温の外気はボーズなどを冷凍して保存食とするのに最適だ。乳製品の加工には低温以外に乾燥状態を巧みに使っている。モンゴルのチーズは固く、口の中で溶けると甘みが出て美味しい。ヨーロッパや日本のチーズとはかなり違っている。外気温や室内温度、また極度の乾燥状態を巧みに使って生活していることがわかった。





乳製品を発酵・乾燥させた食品:正月の祝い膳に使う





正月のお供えのひとつで、ゲルの奥の祭壇に飾る羊肉

3) 住居

ウランバートルの市街地は近代的な高層ビルが林立している。建築中のビルは気温の低い冬季は工事が中断されている。武田さんの話では、気温の低下はコンクリートの固化を妨げ、強度不足になるので、冬の間は工事ができないのだそうだ。建築中のビルを見るとほとんどスジカイがない。モンゴルでも大陸中央部特有の震度3程度の地震があるというが、耐震構造はどうなっているのだろうか。日本では見られない構造にある種の恐怖を感じた。高層ビル群や市内のホテ

ルには熱供給プラントから温水が配給されるので、暖房や温水利用は完備している。冬でも暖かい室内は快適な環境だという。熱供給パイプラインは主に主要道路の地下に配置されており、河川を超えるところなどでところどころ地上のパイプラインが見える。ウランバートル市内のスモッグは発電所や熱プラントが発生源ではなく、市北部にあるゲル地区で各住居の熱源として使われている石炭ストーブが原因だ。ゲル地区に住む人たちの高層ビル住宅への移住が進められている。



UB市街のビル



建築中のビル



日馬富士スクール



熱源供給プラント(エルデネット)



ウランバートル駅



仏教寺院

ウランバートル駅やエルデネット駅は古い建物のひとつで、旧ソ連時代に建てられたものだ。社会主義時代の建物はところどころに残っており、近代的建築と威容がかなり異なっている。一方、チベット仏教の寺院は古いのかと思いきや、

解放後に再建されたものと聞いた。社会主義時代には宗教弾圧があったが、モンゴル民族の精神的な支えは消滅してしまったわけではないのだ。

ゲルは遊牧をしている農家の移動式住居である。円形の天井を2本柱が支えており、この天井から放射状に垂木状の木材が周囲のメッシュ状の壁材に向かって広がっている。壁となっているメッシュ材と放射状の天井材の外側をフェルトで覆い、その外側を2~3本のひもで縛って固定する構造となっている。入口は左側に蝶番のある木製のドアで南側に面して設置する。床は何重にもカーペットが敷かれており、地温が直接伝わらないようになっている。夏場はカーペットの枚数を減らしたり、壁面のフェルトを薄くしたりして温度調節をする。



ゲルの入口



ゲルの天井構造



内側から入口をみたところ



入口から奥の祭壇をみたところ



ゲルの奥に敷布団を敷いているところ



就寝時の様子

ゲルの平面的利用形態には決まりがある。入口の右側は女性の管理区分、左側は男性の管理区分となっており、一番奥は祭壇となっている。祭壇前は食卓であ

り、いわゆる客間も兼ねている。天井を支える2本の柱の間を通ってはいけない。 帽子を後ろ前にして入口を通過してはいけない。

我々が宿泊した農家は冬用の家畜小屋 (パドック) の側に建てたゲルに民泊さ せていただいたが、就寝時には敷布団と掛布団だけで大変暖かかった。持参した 3シーズン用のシュラフは全く不要であった。とにかく、ゲルは万能だ。ただし、 風呂やシャワーは無い。夏場は近くの川で水浴びができるが、冬の間は体を洗う チャンスはない。汗もかかないからシャワーを必要としていないのかもしれな い。沐浴が大好きな我々日本人はホテルでのシャワーの存在はありがたい限り だが、滞在中それほど必要としないことに自分たちでも驚いた。



ゲルのトイレ





列車のトイレ



駅のトイレ

農家のゲルのトイレは昔懐かしいポッチャントイレだ。土を掘って穴をあけ た上に小屋を建てたもので、風通しが良く冬は大変寒い。入口の外側にある手回 しの木のカギが開いていれば中に人がいるとがわかる。内側にも同様のカギが あるので空けられることはないが、ノックはしたほうが良い。世界最先端のトイ レに慣れた日本人は大変だと思う。ロールペーパーの使い方には注意が必要だ。 紙は焚き付けに使えるので、捨てないで取って置くのが普通だ。トイレには紙を 捨てる専用の箱が付いている。都市の高層住宅やホテルのトイレは整備されて いるが、紙の利用に関しては、ゲルと同じルールが残っていて、流さないのが普 通だということだ。

5. 自然と人間の共生

モンゴルは草原の国で家畜といえばヒツジが有名だが、それ以外のも家畜の種類は多い。カシミヤを生産するヤギ、ウシやウマはどこにでもいる。めったに見られない珍しい家畜としては、ラクダ、シカやヤクがあげられる。セレンゲリゾートではラクダとシカを飼っていてまるで放し飼いの動物園のようだ。民泊させていただいた農家のバッチャガルさん家族では、8人の姉妹・兄弟と母親との共同財産としてヒツジとヤギが800頭、ウシ180頭、ウマが160頭、それに牧羊犬のチベタンマスティフを4頭飼っていた。近隣では大規模な農家だということだった。もともとは野生であった動物を人間が飼育しやすいように改良して造られたのが家畜だ。特に、ウマとイヌは人間の考えを理解して行動してくれる身近な動物であり、自然と人間の共生の原点ともいえる存在だ。一方、ラクダやシカはなかなか言うことを聞いてくれない。彼らの飼い主は動物の考えがわかるのかもしれない。





ウシやウマはどこにでもいる







家畜としてのシカ

大草原を見晴るかす景観は美しく、遠くに見える森林は樹種が良くわからないが、ダルハンやエルデネット周辺では主な森林の樹種はゴョウマツである。ウランバートル周辺ではカラマツが主な森林樹種であり、北西部ではカラマツとトウヒの混交林となる。50年前はウマが移動手段であったが、最近では自動車が主な移動手段に変わった。なだらか斜面に沿う道路では自動車が通るようになると、雨が降った後に洗堀による浸食が進むようになり、根株が現れた樹木が見られるようになった。ウマでの移動の時代は自然と人間の共生が実現していたが、車の時代になって共生が崩れてきた感が否めない。



生まれたばかりの子牛



牧羊犬のチベタンマスティフの子犬



ゴヨウマツの原生林



浸食されて露出した根株



集落内のアキニレの大木



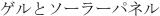
市場で売られている各種の木の実

地方でも集落は河川の近くから発達するので、集落の側には河畔に特有の樹木が生えている。例えばアキニレという樹種があげられる。日本にはハルニレという樹木があり湿地に生え春に開花するが、モンゴルのニレは秋に開花するアキニレだ。ハルニレと同様に湿地を好む樹種である。モンゴル南部の礫沙漠地帯でも河川の跡地に根付いているのをみたことがある。エルデネット市内の市場では各種の木の実が売られていたが、これらは全て野生の木の実である。マツの

実は針葉樹の果実だが、ブルーベリーやシーベリー(チャチャルガン:グミ科の植物)は広葉樹の果実である。モンゴルでは貴重なビタミン源となっている。

一方、ほとんど全てのゲルの傍にはソーラーパネルが設置されており、太陽の向きに合わせて時々回すことができるようになっている。またゲル内の祭壇の隣にはテレビが置かれており、パラボラアンテナからケーブルが引かれていて衛星からの電波を受信して放送を見ることができる。日本の相撲もどこでも見ることができるようだ。







ゲル内の液晶テレビ



巻き割り



トーテムポール

一宿一飯のお礼に薪割を手伝ってきたが、その薪にもモンゴル考え方があるそうだ。モンゴルでは、野生で生きているものは殺生してはいけないのだという。だから、薪は枯れたものしか使わないという。地方政府から許可が得られる薪の量はひとり1年間2立米だという。直径が30cmの木なら3から4本というところだ。これでは少ないかもしれない。セレンゲリゾートの中にはトーテムポールが飾ってあったが、アミニズムは強く感じられた。テレビなどのように自然との共生から徐々に離れていく感もあるが、自然と人間の共生の最前線だという見方もできるのだろう。

6. 旅行経費

1) 航空券

航空券は大韓航空のインターネットサイトで直接購入した。なお、武田・竹 永・粕谷の3名分のチケットは武田氏のご協力ご指導により購入していた だいた。各自のチケットの値段が違うのは購入時刻の違いで、遅くなるほ ど高価になることがわかった。ちなみに、11月中の価格を見ると5万円台 のものがあることが分かった。

武田幹男: ¥68,580 (2018/12/12/07:30 購入) 野堀嘉裕: ¥87,580 (2012/12/12/11:00 購入) 竹永哲夫: ¥87,580 (2012/12/12/15:30 購入) 粕谷俊矩: ¥96,580 (2018/12/12/16:40 購入)

2) ソウル滞在費

1月29日のソウル駅近隣のスカイコージーハウス、2月4日のソウル仁徳駅近隣の新羅ステイ麻浦ホテルは野堀がインターネットのホテル予約サイト「Bokking.com」で予約した。スカイコージーハウスは2部屋4人分で120,000ウォン、新羅ステイ麻浦ホテルは2部屋4人分で168,064ウォン、合計288,064ウォンであった。

3) ソウル空港鉄道 AREX 移動経費

1月29日ソウル金浦空港からソウル駅までのAREX 各駅停車便は4人分で8,200 ウォン、内デポジットが4人分2,000 ウォンなので駅到着後に返金した。実質は4人分で6,200 ウォンであった。

1月30日ソウル駅から仁川空港までのAREX も各駅停車便を利用した。4人分で21,000 ウォン、内デポジットが4人分2,000 ウォン、実質19,000 ウォンであった。

2月4日仁川空港から仁徳駅までの ARX は各駅停車便を利用した。4人分で 21,000 ウォン、内デポジットが4人分2,000 ウォン、実質19,000 ウォンであった。

2月5日仁徳駅から金浦空港までのARXも各駅停車便を利用した。4人分で8,200 ウォンであった。鉄道チケットを記念に持ち帰るためデポジット分の返金は行わなかった。

4) ソウル滞在中の雑費

1月30日は朝に明洞市場、南大門、南山のソウル市内観光をしたが、南山の麓のカフェでコーヒータイムをとった。費用は4人分で11,000ウォンであった。2月4日新羅ステイ麻浦ホテルの隣のコンビニでビールなど購入費用は4,000ウォン、2月5日朝の仁川空港でのコーヒーは24,000ウォンであった。韓国内で支出した金額は合計379,464ウォンであった。日本円換算では37,187円で一人当たり9,297円となる。

5) モンゴル国内通訳・自動車借上げ費用

日本語とモンゴル語の通訳は野堀の知人のホイガ (Gawaadondov Gankhuyag)

さんに頼んだ。通訳料は1日100ドル、自動車借り上げ料も1日100ドルの契約とした。滞在期間6日で合計1,200ドルを帰国直前に支払った。日本円換算は132,000円で、一人当たり33,000円となった。

- 6) モンゴルで国内での食費、宿泊費、雑費(日時順で記載)
 - ①1月30日UB市内夕食:UB初日は空港からホテルまでの送迎を頼んだホイガさんの従弟さんを交えて夕食会をすることとした。6人分で500,000トゥグルクであった。この時点で日本円8万円をホイガさんに託し、この中から支出してもらうこととした。
 - ②エーデルワイスホテル滞在費:4人朝食付きで216,000トゥグルクであった。
 - ③SIM カード:1月30日朝にUB市内で携帯電話用のSIMカードを2枚購入した。これは、2部屋宿泊の場合や買い出しなどグループが分散した場合に連絡が可能な状態を確保するための安全策とすることとした。武田と野堀のスマホ(タブレット)に導入した。SIMカードの仕様は30日間10GB2枚で30,000トゥグルクであった。これを日本円換算すると約1,362円となり、一人当たりに配分すると340円程であった。
 - ④1月31日スキー場リフト券他:ホイガさんを含め5人分で50,000トゥグルクであった。スキー借用費用は記載なしで不明。
 - ⑤UB からエルデネットまでの夜行寝台列車料金:5 人分で 151,500 トゥグル クであった。
 - ⑥2月1日:自動車搬送費用:UBからエルデネットまでは従弟さんに自動車を搬送していただいたが、往路自走、帰路バス移動の費用として200,000トゥグルクを支出した。
 - ⑦2 月 2 日セレンゲリゾートホテル滞在費: 5人分2部屋1泊5食で合計 570,000 トゥグルクであった。これを4人で分割すると一人当たり6,477円 となった。この時点でホイガさんに日本円4万円を託し、この中から支出してもらうこととした。
 - ⑧スキー場リフト稼働費用・乗馬費用:リフト(ロープトウ)はほぼ貸し切り 状態で、稼働時間で費用が決まるシステムであり、3時間稼働で50,000トゥグルクであった。馬は2頭3時間借り上げで80,000トゥグルクであった。 日本円換算は一人当たりリフトが570円、馬が1,000円であった。
 - ⑨2月2日ゲル民泊:5人で1泊するにあたり140,000トゥグルクを謝礼としてお渡しした。これ以外に菓子や酒など40,000トゥグルク分を土産として持参した。民泊したゲルではミルク紅茶やボーズと呼ばれる肉饅頭を中心とした夕食と朝食をご馳走になった。
 - ⑩2月3日エルデネットでの昼食:エルデネット市内の昼食では60,000トゥグルクを支出した。借り上げ車の左ドアミラーが破損していたので市場で鏡やガムテープを購入し仮補修した。この時点でホイガさんに日本円4万円を託し、この中から支出してもらうこととした。この他、ミラー修理費用の補填として4人からホイガさんに4万円がカンパされた。この費用は支出外とすることとした。
 - ①UB 市内 KHABU ホテル滞在費: 4人2部屋で298,000トゥグルクであった。夕食はマモンゴル風シャブシャブ料理レストランのキシポットで405,000ト

ゥグルク支払った。

- ②2月4日はノミンデパートで換金後、同デパートやカシミヤ専門店のゴールデンゴビ、UB駅前の日用品店で各自買い物をした。昼食はゴールデンゴビに隣接するレストランで200,000トゥグルク支払った。
- ③モンゴル滞在中上記以外にスキーの借り上げ費用、夜行列車での飲み物代、 乾電池代その他が含まれる。明細がある支出だけを合計すると3,115,500ト ゥグルクであった。これを日本円に換算すると約142,000円で、一人当たり 約35,000円となった。

7) 支出総額

航空券の平均額は約85,000円、集金は1月30日のエーデルワイスホテルで20,000円、2月1日のセレンゲリゾートホテルで10,000円、2月3日のKHABUホテルで10,000円、また2月5日には通訳・車借上げ費用・ソウル滞在経費を38,000円集金したので、集金額合計は78,000となり、残金返金額は一人当たり300円となった。収支報告はエクセルファイルで閲覧可能である。

日付	費目	金額		
12/12	航空券	85, 000		
1/30	集金	20,000		
2/1	集金	10,000		
2/3	集金	10,000		
2/5	集金	38, 000		
合計		163, 000		

支出合計

8) 個人ツアー集合体のメリット

1月末出国のモンゴルツアーを旅行代理店に見積もって頂いたところ、4人での往復の航空券が一人当たり15万円台になることが分かった。個別にインターネットで発注することにより航空券代が極端に抑えられた。また、今回のツアーは個人が自由に旅行する日程と内容を調整し合うことで費用を抑えることに成功した事例だと思われる。当初の費用見積もりより安価で旅行することができた。通訳費用や車の借上げ費用は相場より幾分高額であったこと、当初の見積もりに酒代が含まれていなかったにもかかわらず、想定より割安に旅行ができた理由としては、全て原価で支払うことができたこと、ホイガさん(通訳)の立ち回りが上手だったことがあげられる。